

令和 6 年度
東京の林業振興に向けた専門懇談会
(第 1 回)
議 事 録

令和 6 年 7 月 2 9 日 (月)
都庁第一本庁舎 7 階大会議室

東京の林業振興に向けた専門懇談会（第1回） 議事録

日時：令和6年7月29日 午前10時00分から午前11時50分

場所：都庁第一本庁舎7階大会議室

《 開 会 》

《 第一部 》

【司会（榎園部長）】 ただいまより令和6年度東京の林業振興に向けた専門懇談会第1回の第1部を開催いたします。

私は、東京都産業労働局農林水産部長の榎園と申します。座長が選任されるまでの間、進行役を務めさせていただきます。

本懇談会は、東京の林業を取り巻く情勢が変化中、その時々課題等に的確に対応していくため、早急に取り組むべき事項につきまして専門家の皆様から多角的な視点でご意見をいただき、今後の施策に反映させることを目的とさせていただきます。

本日の委員の皆様の出席状況でございますが、5名全員の出席をいただいております。

次に、資料の確認をさせていただきます。お手元には、会議次第、資料1の委員名簿、資料2の本懇談会の設置要綱をお配りしております。そのほかの会議資料につきましては、お手元のタブレットとモニター画面に表示いたします。

なお、本日の懇談会はインターネットの同時中継を行います。また、議事録は公開されますので、ご了承のほどお願いいたします。

次に、本日ご出席の皆様のご紹介をさせていただきます。

まず、委員の皆様について、名簿の順にご紹介させていただきます。

酒井委員でございます。

庄司委員でございます。

鈴木委員でございます。

徳永委員でございます。

中島委員でございます。

次に、オブザーバーとして参加いただいております、ミズとうきょう林業に就任されております株式会社東京チェンソーズ、飯塚様でございます。

また、第二部でご講演をいただきます、株式会社農林中金総合研究所主任研究員、安藤様でございます。

よろしくお願いいたします。

それでは、次に、本懇談会の座長の選任を行いたいと思います。

お配りしております資料2、本懇談会の設置要綱、5の規定に「懇談会には座長を置き、専門家等の中から互選する。」「座長は懇談会を進行する。」とございます。

どなたか座長のご推薦をお願いいたします。

【鈴木委員】 酒井先生にお願いしたいと思いますが。

【榎園部長】 ただいま鈴木委員より、酒井委員を座長にとのご推薦がございました。皆様、いかがでしょうか。

（「異議なし」との声あり）

【榎園部長】 ありがとうございます。

酒井委員、お願いできますでしょうか。

【座長（酒井委員）】 はい。

ただいま選任されました酒井でございます。本日は円滑に会議が進みますよう、どうかご協力のほどよろしくお願いいたします。

《 議 事 》

東京の林業振興に向けた意見交換

【座長】 それでは、早速ですけれども、議事の「東京の林業振興に向けた意見交換」ですけれども、最初に資料の説明を鑑森林課長からお願いいたします。

【鑑課長】 森林課長、鑑でございます。お手元のタブレット又は前にありますモニターをご覧ください。

今年度は5つのテーマを設定いたしました。それぞれの現状と課題について簡潔にご説明をいたします。

まず、「花粉発生源対策の加速化」でございます。

左側のグラフをご覧ください。東京の森林における人工林の齢級構成の推移を表しております。昭和46年には20年生以下の木が多いですけれども、令和5年では50年生を超える

木が多くを占め、まさに利用の適期に入っております。

右側は、人工林の蓄積量と伐採量を表しております。蓄積量に対しまして伐採量が過小であるため、蓄積量が増え続けていることが見て取れます。この現状の打開には、伐採を更に加速させるための効果的な施策、例えば森林を所有する方々が伐採に協力したくなるような仕掛けなど、そういったものを打ち出す必要があります。

次に、先進林業機械の導入拡大等による施業の省力化等でございます。

グラフは、東京に隣接する県がどの高性能林業機械を何台持っているかを示しており、東京の保有台数は少ないことが分かります。高性能林業機械が高価であること、現場の地形、現場までのアクセスなど、要因は様々考えられます。

右の写真は、オーストリア製のタワーヤーダです。昨年5月から本格稼働を始めました。丸太の生産性が2倍に向上したほか、従来のものに比べまして架線の設置、張替え時間が大幅に短縮されました。また、無線遠隔操作のため、人と機械の接触が少なく、作業の安全性が高まりました。先進林業機械は、作業の効率性・生産性を上げることはもちろん、作業員の安全確保に貢献いたします。現場の地形や林道との位置関係などを踏まえ、適切な機種を導入していくことが重要です。そして、現場の作業員が導入した機械を扱える技術を実践に身につけるため、効果のある操作研修、継続したフォローアップが必要です。

次に、木材供給能力の強化でございます。

グラフは、都内唯一の原木市場である多摩木材センターでの取扱量です。ここでは建築用材であるA材が取引されますが、年間1万5,000立方メートル前後で推移しております。

これは、スギ丸太の価格を関東近県の県産材と比較したグラフになります。多摩産材の市場は小さいため、価格に幅がございますが、概ね中位に位置しております。丸太の価格が上がり、森林所有者に利益が還元されるようになれば、木を伐ろうという意識が生まれ、また利用する側が必要なときに必要な量を手に入れば、原木市場や多摩産材への信用が高まります。流通拠点としての市場機能の拡充を含めまして、多摩産材が信頼されるブランドイメージが必要です。

次に、DXによるサプライチェーンの見える化でございます。林業の現場では、ドローン等を使ったレーザ計測、森林の3次元画像化など、DX化が進みつつあります。多摩産材は公共利用において間違いなく多くの需要がありますので、供給量を増やすことは言うまでもなく、製材所などの利用者に対する適切な情報提供、サプライチェーンの構築が求められております。

最後に、多様な主体による森林整備支援の促進でございます。昨年7月に森林環境譲与税の活用に係る都内連携に対する協定を締結したところですが、今年6月に森林環境税の徴収が始まりました。この財源を適切に有効に活用することはもちろん、森づくりの大切さを積極的に発信し、森づくりへの都民の理解を深め、機運を醸成していくことが必要です。

また、社会全体でSDGsへの関心が高まる中、環境貢献活動として森林整備に取り組む企業やボランティア活動に参加する方が増えております。都におきましては、真ん中の図になりますが、企業と森林所有者、農林水産振興財団の3者が協定を結び、花粉の少ない森づくりを行う「企業の森」や、ボランティアが森林整備作業を行う「とうきょう林業サポート隊」を運営していますが、さらに多くの方に森づくりに参加していただく機会の創出や仕組みの提供が必要と考えます。

私からの説明は以上になります。

委員の皆様には東京の林業振興に向けましてご議論いただき、アイデアやご意見を頂戴したいと考えておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

【座長】 どうもご説明ありがとうございました。

それでは、資料に沿って皆様からご発言をお願いいたします。

それから、ご発言の後、質疑の時間も設けておりますので、飯塚様、安藤様もご質問がございましたらご発言をお願いいたします。

それでは、順次、各委員からご質問、ご提案等をお願いいたします。

まず、花粉発生源対策の加速化。いろいろ人工林の蓄積も上がっておりますけれども、何かご発言はございますでしょうか。どうぞ、徳永委員、お願いします。

【徳永委員】 徳永です。ありがとうございます。

森林の木材の利用ということはとても大事だと思います。一方で、気候変動対策としての森林という捉え方が非常に大事だと思っていまして、大気中のCO₂を吸収するという森林の価値というものが求められているかと思います。ですので、こういった森林は大気中のCO₂を吸収するという意味で非常に重要な役割を担っていると思いますので、その価値の設計というところが重要になってくるのではないかと思います。

【座長】 ありがとうございます。ただいま、CO₂の吸収の機能も大事ですよということで気候変動と絡めてご発言がございました。

委員の皆様から何かございますでしょうか。どうぞ、中島委員、お願いします。

【中島委員】 先ほどの資料1を拝見しますと、50年生以上の木がだんだん増えてきて蓄積量が増えているのですが、伐採量がなかなか増えないということに関してなんですけれども、私は所有林の中で伐採搬出という仕事を主にしているのですが、伐採量を単に増やすということであればどんどん伐って進めていけばいいとは思いますが、昨今、伐っていく中で、うちは基本的にはどちらかというと間伐搬出というメニューを中心とした伐採搬出を行っているのですが、もう一つは架線集材における皆伐作業などもあると思うんですね。その中で、皆伐のほうで現場を見ていくと、伐採した木材が市場に出すのはやはりアクセスのいいところ、林道付けがいいところに限られているということがあるのと、あと、伐採した跡地に当然植林を行うわけですが、ある程度大規模で伐採をした跡の植樹地を遠目から見ていると、やはりシカ等の食害に結構ダメージを与えられている現場が見受けられたりですとか、あとはこの天候不順とか、気候変動というか、暑いので、この下草刈りの作業における労働する人の人材の確保は結構厳しいのではないのかというふうに思っておりまして、伐って使うというところに関してどんどん加速していくことはいいのですが、次世代に向けた森づくりをちゃんと担っていくためにも、労働力を確保するための何か施策といったものをもう少ししたほうがいいのかと思うところと、あとは伐採量が少ないということで、そういった好立地な場所ではないところに関してはやはり小さい機械を使ってコツコツと出すという作業もしていかなければいけないと思うので、そういった小さい現場、つまり小型な機械での作業ができるような施策みたいなものももう少し検討されたらよいのかなと。

労働力の確保については、実際林業をやりたいと思っている方々というのは結構多いのですが、要は労働対価に対する問題とかがあって、通常で考えた場合に、例えば国交省が出している公共工事の労務単価の平均値の金額が的確に現場で働いている作業員にもし支払っているのならば、そんなに賃金に関しては難しい問題ではないのかなとは思いますが、もう1点が、労災保険等の加入とかに対する何か手だてというか施策があれば、もう少し労働環境、労働者を確保することというのは簡単になるのではと思います。技術的な面と、要はいわゆる人間関係というのが一番難しいところではあると思うので、そこら辺でまずはできるところからちょっと改善が進めばいいのかなというふうに思っています。

【座長】 どうも貴重なご意見をありがとうございました。CO₂吸収とか花粉発生源対策で森林に活力をもたらそうということだろうなと思います。更新とかを含めますとですね。そこで、ただいまいろいろ、例えば造林するときの下刈の問題ですとか、シカ対策で

すとか、労働の対価というお話が出ましたけれども、これはこのままずっと皆様から、この資料を見ながらいろいろ出てくるお話かなと思って、また最後に戻りたいなと思います。どうも問題提起をありがとうございます。

そうしますと、時間も限られている中で、2番目の林業機械のところをお願いできますでしょうか。これも今、機械化のお話がありましたけれども、やはりこれを見ますと東京都の機械の導入台数が少ないということで、解釈によっては伸び代があるなと思います。先ほど中島委員のほうから機械化とかございましたけれども、やはりインフラですね。道をどう活用していくか。タワーヤーダが入りましたけれど、非常に作業能率のいい機械ですので、ここで大規模な間伐あるいは皆伐、それから小規模作業も必要ですので、大型の機械化と小型の機械化、共通するのはその稼働率をどうするかですね。例えばこのタワーヤーダを入れて枝梢端部をつけた全木集材をして、ここにチップパーを持ってくれば、そういった今まで未利用だった部分がエネルギーとして使えますよということで、新たな市場開拓につながっていくんだろかなと思います。そういうことで、どうやってこれから労働力を確保していくか。今、先ほど労働力というお話がありましたけれども、新しく――新しくといいますか、林業従事者に安全な職場の提供と、それから労働対価をどうするかということですね。これは安く出して高く売るということで、いかにして森林所有者さん、働く人にお金を還元するかということになるのかなと思います。具体的にはいろいろ考え方があろうかなと思いますけれども、そういった方向性で考えていくことができればいいのかなと思います。

この件に関して、何かご意見ございますでしょうか。よろしいですか。もし後でまた総合的にお話をいただければなと思います。

それから、木材供給能力の強化ということでページをめくっていただいて、ご意見ございましたらよろしく願いいたします。単価の推移もございますけれども、こういった中で東京都の林業をどうするかということになろうかなと思うんですけれども、ご意見ございますでしょうか。

庄司委員、お願いします。

【庄司委員】　ほとんど東京は、一大消費地でもありながら集積地でもあります。今、木材を取り巻く環境というか、現状は、2020年にコロナウイルスが発生しまして、米国ではテレワークが進んで、アメリカ自体で戸建ての住宅ブームとかDIYの需要が増えまして、我々日本は、今までは住宅というとほとんど外材を使っていたんですけれども、その外材

の供給が少なくなってしまったということで、国産材が脚光を浴びております。そして今、為替が140円から150円、160円になってしまいましたので、輸入材がかなり高騰しているという状況でございます。そういう流れでございまして、またロシアとかウクライナ、またイスラエルとか、そういう意味で外国から来る船が南アフリカを通ってくるという、頼んでから来るのがまた長いとか、そういう輸送コストも重なりまして、非常に外国産材は高くなっています。その中で一番今安定しているのが国産材でございまして、この流れはこれからもずっと続くと思います。ですから、今まで外国産材に取られていた市場が国産材に戻ってくるということは確実でございますので、そういう意味では供給をしっかりといただかないと、我々とすれば頼んでもこれだけしか集まらないとか、それでは困りますので、やっぱり東京都の材木、一番近いですから、そういう意味では輸送ですとかそういうものが短く、量が出せる——この間も林業の方々とお話ししましたら、やっぱり作業道と林道を整備してほしいと。そうすれば多少はもうちょっと今よりも伐採量が増えたと、そういうふうにお伺いいたしました。

以上でございます。

【座長】 どうもありがとうございます。最後にやはりインフラに戻ってきたわけですが、東京都の森林、地形、地質を見ますと、高知県に非常に似ているなということで、皆さんの高知県に対するイメージって地形が急峻だということだと思うんですが、それと同じような地質構造ですので、その中でどうやって道あるいは架線、タワーヤードを組み合わせっていくかということになろうかなと思います。

今、国産材に向けていろいろなサジェスションがあったんですが、この辺で、安藤さんもこの後お話しなされることだと思うんですが、あと中島委員も、今のお話につきまして簡単にコメントいただければなと思います。

【安藤プレゼンター】 安藤です。

まだ機械が少ないというところではありますけれども、機械を入れても道がなければ使えませんので、まずは本当に今言われたインフラづくりというのをしっかり整備していくというのが基本なのかなというふうに伺っていて思いました。

あと、インフラも整備が進めば機械の稼働率も上げていけるかと思うので、その機械を入れる以前にどれぐらい稼働できているのかだとか、そういった作業体系の見直しということも含めて考えていく必要があるかなというふうに思います。

以上です。

【座長】 どうもありがとうございます。

中島委員、何かございますか。

【中島委員】 先ほど安定供給の部分のお話がありましたけれども、安定供給を行うために林道と機械化というのは多分必須なんです、その前に森林を所有している方がいて、所有者が結構東京の場合は細かく点在していたり、かつ担当局による網掛けに結構規制があったりして、例えば産業労働局ではこういうやり方があります、環境局ではこういうやり方がありますというような網掛け等があって、その網掛けによって集約化へ移るのにちょっと難しいなという部分もあるので、そういった部分に関してはちょっと東京都さんの中で少しもんでいただいて、集約して作業が進むような仕組みをつくっていただけたらより安定供給には結びつくのではないかと思います。

【座長】 どうもありがとうございます。ただいま「安定供給」というキーワードが出ましたですけれども、非常に大事なことだと思います。サプライチェーンとか、そういうことかなと思います。

ここで、実際に働く立場から、東京チェーンソーズのみずとうきょう林業の飯塚さんが見えですので、何かご意見なりご感想でもお聞かせいただければなと思いますけれども。

【飯塚オブザーバー】 飯塚でございます。

ちょっと戻ってしまうんですけれども、先ほど酒井先生がご提案されていた施業省力化の話の中で、例えば作業道にチップを持ってきてウッドチップを作ればそこでまた新たな市場ができるというお話だったかなと思うんですけれども、そういった認識で合っていますでしょうか。

【座長】 ええ、それで。

【飯塚オブザーバー】 何かその売り先とかまでを、やはり林業事業体は小さいです、正直申し上げて施業するので精いっぱいというところがほとんどだと思います。営業体制だったり、それを進めるための広報だったり、そういったところまで担える事業体というのはとても少ないと思っております、東京都のほうでも非常に支援いただいておりますけれども、6次産業化というような視点だったりとか、もう少し、本当に促進していくために何が必要かという大きなスパンでの考え方というのにも必要なのかなと感じました。

【座長】 どうもありがとうございます。いろいろ、人材育成ですとか、あるいは林業への新規参入とか、そういったことも大事なんだろうかなと。あとは6次産業とか、ほかの農業との連携とかですね。この辺はまた後でいろいろなご意見をいただこうかなと思います。

す。取りあえずありがとうございます。

ここで、次の4番目で、サプライチェーンの見える化というところも出てきましたので、今市場の写真がございましたけれども、やはり市場というのはサプライチェーンの重要な機能を果たすと思いますので、4番目のこの絵に関して何かございますでしょうか。特に今、スマート林業とか、いろいろデジタル通信技術を使いましょうということですけども。

私も一度多摩木材センターを見せていただきましたけれども、もっと広いといいなと。あるいは、もう何か所かあってもいいかなと。要するに、市場というのは英語で言うといろいろな言い方があるんですけども、1つにはストックヤードということがあって、ストックヤードというのは需給バランスの調整を取っていくというようなことで、ここに丸太が来て、虫が入らない、腐らせないようにというようなことであれば、屋根をかけるとかそういったことも大事かなと思うんですけども、やはりそういったことで労働力の需給バランスを取りながら、仕事の安定化とかそういったことも必要なかなと思います。

ここで言う川上から立ち上がっていく感じなんですけれども、これでサプライチェーンというわけですけども、一方で需要があって、需要から供給側へ、山元へアクションを起こすという、やはりデマンドチェーンという見方も大事かなと思って。では、その東京都の木材のデマンドをどうつくって、要するにマーケットをどうつくるかということになろうかなと思うんですけども、この絵を見ながらいろいろな考え方を、ここに市民も入ってくるかなと思うんですけども、こういったようなところで何かご意見ございましたら。

もう一回庄司委員に戻しますけれども、よろしくお願いします。

【庄司委員】 実は私も先週原木センターの市場へ行ってみまして、見ていましたんですけども、僕ら材木屋からすると、夏に伐採した丸太を買ってはいけないというのが常識でして。というのは、虫がいるとか、多いですよとか、それとか水分が多いのでカビが生えてくることがあって、ですから冬伐りとかそういう丸太を買いなさいというのが僕ら材木屋さんの常識なんですけれども、行きましたら結構お客さんもいたし、元落ちもなく全部買われていました。中島さんもいらっしゃいましたか。

【中島委員】 いなかったです。

【庄司委員】 そうですか。

その中で気がついたのが、丸太に多摩産材の刻印がしてあるんですよ。ということは、

私はやはり多摩産材というのをブランド化して、それを流通していく。多摩産材はこんな
にいいんだということをPRしていったほうがいいのではないかと思ったんですけど。

以上です。

【座長】 どうもありがとうございます。今、多摩産材のブランド化ということなんですが、ちょっと深く議論したいなと思うんですが、ではブランド化って何なんだろうかなというのがあるって、全国に林業産地はあるんですけども、ここに加工の写真がございすけれども、昨年いろいろ製材過程を見させていただいて、やはり乾燥を丁寧にやっておられるし、木取りも丁寧にやっておられるので、私はブランド化というのは安定した品質だなと思うんですね。ヤングの強度もあるし、乾燥も十分できているというようなことで。それが市場の信頼を得てということが多摩産材のブランドでということで、目をつぶってでも注文できるようにというのが大事なかなと思うんですけどね。適地適木でそれぞれ産地がございすので、特産の樹種ってあると思うんですけども、そういったことでぜひPRをしていけばいいのかなと思うんですけども。この辺、中島委員、ご意見をお願いします。

【中島委員】 先ほど庄司委員からもありましたが、夏場の木はあまりよくないということで、木には年輪が断面を伐ると見えるではないですか。冬目、夏目ってあると思うんですけど、木材がどのように成長するかと考えたときに、木って中心の年輪と外側の年輪があるではないですか。どちら側の年輪が新しくできた年輪かというのって皆さんってどれくらい御存じなのかなという。ここで質問するような内容ではないかもしれないですけども、この質問をしたときに、結構いろいろな体験で来る人とか、学校の方とか、専門家の方も当然いるんですけど、質問をすると、木は中心の年輪が新しくて、外側に外側に、新しい年輪が外に向かっていくんだよと。だから外側の年輪が細くなっているでしょうって説明されている人が、思っている方がいて、これは答えから言ってしまうと、外側の年輪が毎年毎年外に外にできていくわけですよ。外側の皮の部分と幹になる部分の形成層のところが分断しながら変わっていくと思うんですけど、これがレタスとかキャベツとか葉物野菜のように木は育つと思っている人たちが結構今増えていて。だから、何とか材とかいうブランドという形も大事なんですけど、もうちょっと原点に返って、木はどうやって育って消費者のもとに行くかというのが分かる木材、それが東京の木、多摩産材だよみたいなアピールをしたほうが僕はもういいのではないのかなって思うぐらい、木がどうやって育っているか分からない人たちが増えているという現状にちょっと危機感すら覚え

るかなと思うので、ぜひそういったことも検討していただけたらと思います。

【座長】 ありがとうございます。教育のほうに関わってくるということですかね。

そうしますと、ここまでで一通り4番目までお見せいただいたんですが、いろいろなご提案、ご意見をいただきました。

ここで、5番目で、今中島委員から出ました市民への教育あるいは小中学生への教育というようなことになると、多様な主体になってくるわけですが、ここに今都民がごそっと入ってくると思うんですが、こういった中で森林整備支援をどうするかというようなことで鈴木委員にご意見をいただければなと思います。よろしくお願いします。

【鈴木委員】 ありがとうございます。ちょっと戻るかもしれないんですけども、これはもう去年からずっとお話しさせていただいているんですが、これはマーケット側、市場側の連携協定は非常にいいものだと思っていて、これもずっと以前からご提案させていただいて、やっと実現してうれしいななんて思っています。結構地方の森林と協定を結んでいらっしゃる23区の方々は多くて、そうすると多摩産材をすっ飛ばして、もちろん国産材を使うということ自体は奨励されるべきことなんですけれども、もっと近くにちゃんと木材ってあるんだよ、森ってあるんだよという認識が、これである程度。たしか今、23区の半分ぐらいがここに乗っかってきている……

【鑑課長】 今、一応6区が乗っかっています。

【鈴木委員】 まだ6区だけなんですか。ああ、そうですか。もっとそれは増やしていただきたいなと思います。

と同時に、先ほど来の多摩産材をもうちょっと普及していきましようとか安定供給しましようという話につながるんですけども、これも繰り返しになってしまいますけれども、では供給側も連携協定を、災害のときにいろいろと被災している地域が被災していない地域からさまざまなサポートを受けられるというような協定があるのと同じように、例えば向こう数年間の当該地の需要量、そういうものはさっきのDXの話にもつながりますけれども、そういうものをしっかりとみんなで協定先と共有することによって、ではそのタイミングで東京の多摩産材が足りなくなったときに近隣の協定先からどのぐらい調達できるのかみたいな、そんな情報の流通というのがすごく大事ななと思っていますので、ぜひ上流側、要するに供給側のほうの協定というところも、東京都が多分主導しないと難しいんですよ。そこで手を取り合おうという認識ってまだ育っていないと思いますので、そこは頑張っていただきたいなと思います。

【座長】 ありがとうございます。それはいろいろと成長量に対して伐採量とかが決まってきた、それに対してどう労働力を確保していくかというようなことにもなってくるんだろうなと思いますね。要するに、そういう中期的・長期的なビジョンをつくろうということですね。

【鈴木委員】 あとはD Xの活用ですよ。まさにそれはね。

【座長】 はい。

ここで一通り資料に基づいてご意見をいただいたんですけれども、ここから11時5分まであと30分ほどお時間がありますので、フリーにいろいろご意見をいただければと思います。どうぞ。

【鈴木委員】 先ほど冒頭に徳永委員のほうから、森林吸収量のその辺の付加価値というものをもうちょっと出していくべきではないかというようなお話があったかと思うんですけれども、これも去年もそんな話をさせていただいた記憶がありますけれども、都道府県の吸収量認証、これが東京都の場合は針葉樹だけが対象となっているという制度がやっぱりもったいないなと思っていて。今、例えば私のほうで、今多摩地域ですと檜原村と森林整備協定を結んでいて、何で森林整備協定を結ばざるを得なかったのかというと、山持ちさんがもう林業を諦めた地域でも皆伐してしまって、スギ林のスギを伐って売って、その後も自分たちではできないから、地区会のメンバーたちは高齢化してしまっているの、ではプレゼントツリーのほうで天然林のほうに戻すような、景観林に近いような森に戻してくださいというようなニーズに対してお応えしているわけですよ。そういう森に対して、私どもも結構人は集めました。多くの23区、要するに都市部側というんですか、都市部側のほうの住民たち、都民たちを集めて、みんなで森林再生を。東京チェンソーズさんと協定も結ばせていただいて。そういうところにも、しっかりと吸収量がこれだけ担保されているんですよというような認証は欲しいと思います。なので、広葉樹もぜひ対象に入れていただきたいなと思っています。

【座長】 どうもありがとうございます。

どうぞ、飯塚さん、お願いします。

【飯塚オブザーバー】 先ほどの④⑤にかかる場所なんですけれども、なぜ多摩産材を推す必要があるかというのを都民にどうすれば実感していただくかというところを考えるのが大事だと思っていて、ただ品質がいいからというだけではほかの地方と変わりはない。なぜ東京都民が東京の木を使う必要があるかというと、それは絶対おいしい水と空気を

つくっているのが東京の森だからです。その森を維持管理していくために、では伐った木をみんなで使おうよという、その意識をもっと教育していくなり、関係者もそこを認識として、流域という考え方、うちの青木がよく言っているんですけども、そういったところも大事なのではないかなと思いました。

【座長】 どうもありがとうございます。

この件に関して何かほかにございますか。徳永委員、何かございますか。

【徳永委員】 ありがとうございます。例えば東京の空気とか水とかをつくっているということを認識するということは、木材に対する愛着とか使ってみたいという気持ちを促進するだろうなというふうに思います。

あと、森林が担う機能としては、防災とかそういうところ、今は起こっていないんだけど雨が降ったらどうなるのかとか、実際に木を全部伐ってしまったら、ここに森林がなければどういう状況になってしまうのかというところを意識すると、この森林の価値というところはもっと上がってくるのではないかなと思いますので、やっぱり森林があったときとなかったときを予測するのは結構難しいことではあるんですけども、実際に森林の恵みというのはどういうものなのかというところを認識するというのもすごく重要なことというふうに思いました。

【座長】 どうもありがとうございます。

いろいろ森林の機能のお話が出ましたけれども、冒頭へ戻って、木を伐るということは森林に活力を与えるということで、それで森林の価値も高まるということで、木を伐ることはいいことなんです。まあ、伐り方にもよりますけれども。それも周知する必要があるのかなと思うんですね。問題は伐った木をどう使うかということで、50年生きた木はやはり50年使いたいなと。でも、全部が全部50年使うわけにもいかないの、一部はエネルギーとして化石燃料の代わりに使っていく。使える部分は大事に使っていくということですね。内装材ですとか、あるいは住宅のリフォーム材とかですね。やはり木も長く使うというのは大事かなと思うんですけどもね。

それから、これだけ森林があると、活力を与えると同時に空気中のCO₂削減ということであれば、化石燃料に由来するCO₂よりは再生循環する木から使いたい。何を言いたいかというと、熱利用ですね。木を伐るときに出口がないとあふれてしまいますので、やはりエネルギーとしての利用の出口をつくっていくという必要があるかなと思います。東京都でもいろいろ再生可能エネルギーですとか熱利用しましょうということ、それからZ

EH、ZEVですか、ゼロエネルギーハウスですとか、ここに木質バイオマスが入っていないというのがちょっと課題なんですけれども、そういったエネルギー利用というやり方もあるわけです。

あと、もったいないのは、木を出したときに林地残材がそのまま捨てられてそれが腐っていくというのはもったいないことなので、伐ったら有効活用していくというのも大事なかなと思います。そのためには作業道ですとかインフラも要るし、それに向けたチップーとか機械化も要るかなと思って、そうするといろいろ非常にポテンシャルが高いなと。

それから、美味しい水ですね。東京都のお水はかつてペットボトルで売っていたことがあるんですけど、今でも売っているかどうかはちょっと分かりませんが、飲んだことはありますけれども、水道の水をそのまま飲めるというのは非常に大事なことかなと思います。それはやはりSDGsに絡んでくることだと思いますので、やはり地球環境をどうするかということかなと思います。

ここまでお話しして、この後、第二部で安藤さんがお話しされるんですけど、予告編みたいなことで何か。予告編でなくても結構なんですけど、コメントがございましたらお願いします。

【安藤プレゼンター】 あまり考えていなかったのであれなんですけれども、予告でありましたら、私のほうからはこの後、先ほど議題にありましたDXの話、サプライチェーンの部分についてのデジタル化についての推進と、あともう1点、林業の活性化に当たって出口をどう出していく必要があるか。売り先の視点を持った林業経営というのが大事になってきますので、その出口に関する話をさせていただければなというふうに思っております。

【座長】 どうもありがとうございます。

それから、林業を担う人、森林所有者さん、あるいは山で働く人、それから木材を買ってくれる人、こういった方の関心をどう引き出すか。あるいは、意欲のある人をさらに引き上げていくにはどうしたらいいか。あるいは、意欲がないというか、目覚めてもらうにはどうしたらいいかとか、いろいろ課題があるかと思うんですが、飯塚さん、何か日頃思っておられることはございますでしょうか。

【飯塚オブザーバー】 中島さんおっしゃったように、やっぱり林業をやりたいという人は、特に東京は母数が多いということもあるのかもしれないですけども、弊社も山の未経験者を募集したら絶対ゼロということはありません。必ず何人かは応募してきてく

れるぐらい、やはりやってみたいという方はいらっしゃいます。そういう方が続けて——もちろんずっと続けている方もいますし、中には抜けてしまう方もいる。その理由はもちろん様々ですけど、けがが理由だったり、家族の都合だったりという、本当にそれぞれではあるんですけども、林業という職業の選択肢があるんだよというのはもう少しPRしていてもいいのかなというのが1点目です。

それから、もう1つありまして、林業に関わる、林業という仕事を成り立たせるために、例えば製材業。今、東京の製材屋さんはどんどん減っています。そういったところだったりとか、丸太だけではなく例えばキノコの生産だったりとか、例えば森林サービス、空間活用をするような仕事だったりとか、主体は本当に多様である可能性があると思うので、いろいろな方にこういった場を使うなりでご意見を集めるというのがとても有効なのではないかなと思います。特にやっぱり製材がないと、製品として届けていくにはそこがなくなってしまうともう私たち林業家としても困ってしまうので、その辺りもちょっとサポートいただけるといいのかなと感じております。

以上です。

【鈴木委員】 今のに絡めてちょっと質問をいいですか。昨日、都内の援農ボランティアの方々とお話しする機会があつて、とうきょう援農ボランティアウェブみたいなのがあつてマッチングしているではないですか。一回援農してみると、結構続ける方々が多そうな感じでした。たまたま昨日お会いした方々が熱心な方々だったのかもしれませんがね。それに比べてさっきのお話で、林業体験してみたい方々というのはやっぱり多いですけども、継続しない方々と継続してくださる方々の割合というか、どのぐらいいらっしゃるのかなということと、もし継続されない人たちが多く、1回きりでもう縁がなくなってしまうような方々が多いのであれば、その1回だけでそんなに危険な作業に従事させるとも思えないので、その理由ってどこにあるのかなというのが知りたいんですけども。

【飯塚オブザーバー】 うちの会社で言うと、離職率はどれぐらいかな……。現場に限って、半分以上は続けています。3分の2は続けているとは思いますが。でも、それは会社だったり組合によって状況は違うと思います。する、しない、でもやっぱり待遇に対してリスクの高さというのは一つありますよね、中島さん。ちょっとつないでもらえますか。

【中島委員】 よろしいですか。待遇に対しての費用対危険度合いって考えると、これだけリスクがあるのにこれだけかって思う人が多いというのと、やっぱり一番大変なのってこの時期で、今日もそうだと思うんですけど、この時間帯に最高気温を超えるかということ

きに現場で下草刈りをやっている人たちがいるわけですね。それに対する労働対価とか労働環境の改善というのはなかなかされていないので、やっぱりこれを感じた瞬間に多分もう続けられないなって思ったり、あとは、その中でも結婚してこの村に住みたいという方々も当然いらっしゃると思うし、そういった人たちの中でも、でも実際結婚するとやっぱり費用もそれなりにかかってくる中で生活費を賄えないとなると、離職して違う仕事をせざるを得ないという人たちは結構いらっしゃると思うので、そこら辺の改善をもう少しできたらいいいのかなって思うんですよね。そうすると、一家庭がどれくらいで生活できるのかなという基準とか、そういったことも考えながら後継者育成というのを考えていかないとちょっと難しいのかなって思うところもあります。

それと、あと実際に続くか続かないかという部分って、やっぱり最後は山が好きか嫌いかというところに絶対になってしまって、それはもう対価の話ではなくなってしまうんですけど、やっぱり好きに勝るものはないなって思うので、そこら辺の部分は賃金をたとえ上げても、山とか森林に対する愛がない人はやっぱりそれなりになってしまうので、そこら辺をどういうふうに改善していくかというのと、僕が行き着いたのは教育かなと思って、そこで小学校とか中学校とかそういう人たちと絡むような場をつくる。その場をつくる中で、どうして自分が林業に携わるようになったのかというお話をしていく。僕がしていくとある程度限界が見えてきたのは、「中島さんは山を持っていて恵まれていたからできるんでしょう」ということになるわけですね。そうではなくて、先ほど言っていたように森林を所有していなくても森林に関わりたいという人は年々増えていて、特に例えばチェーンソーズさんなんかでもそういった方々がいて、そういった方たちのお話というのは非常に、森林を持ってない人たちに対して結構心を打つようなこととかがあると思うんですよね。そういったところを少し改善されて、そういったことがもうちょっと表に出るような仕組みというかが大事なのかなと思います。

あと、ちょっと続いて話をしてしまいますけれども、森林に関わりたいと考える人たちが多い現状に関しては、多分僕が普通に思うのは、このままだと地球に人が住めなくなってしまうのではないかなって思う人たちが世界中に多分少しずつ増えてきていて、行動する人たちも確実に多分増えてきていると思うんですよね。だけれども、実際にその中で日本でどれぐらいいるのか、東京でどれぐらいいるのか。例えば僕が住んでいる青梅市でどれぐらいいるんだろうかというのと、やはり結構まだ少なく、実際に山というのは不動産なので動かないから、その現場でやっぱり動かなければいけないってなったときに、思う

人は増えてきているけれども、実際にその現場で活躍する人というのはなかなか増えないというのがやっぱりネックなので、そこら辺を少しずつ改善するためにもコツコツやるしかないのかなという日々なんですけれども。まあ、そんな状況だと思っています。

【鈴木委員】 待遇改善については、今、中小企業のほうのこういう懇談会にも私は参加させていただいていると、みんな経営者ばかりが集まっているんですけど、そうするともう業界団体とかいろいろなところから賃上げのプレッシャーが来過ぎてしまってすごいつらいという話はいただいているんですが、逆に、林業がそれだけ待遇が悪くてリスクが大きいというのであれば、林業事業体向けに最低賃金だけ、そこだけくくってもっと上げてしまうようなプレッシャー、これは出してもいいのではないですかね。逆差別になっちゃうのかしら。そんなことないですよ。

【座長】 オーストリアなんかだと、デカップリングというんですか、ちゃんと地元に残っても町場と同じ収入を確保できるように公的資金が投入されています。環境譲与税もあるので、うまく使えばですね。ただ、あんまりその辺は非常に議論があるところかなと思うんですけど。

【鈴木委員】 頑張ってください。

【座長】 それで、飯塚さんに1つ聞いたかったのは、6次産業ってさっきおっしゃられたんですけど、具体的に何かあるんですか。

【飯塚オブザーバー】 ちょっと弊社の事例で恐縮なんですけれども、今やろうとしているのがまさに林地残材を生かした精油事業で、これまでも実は群馬県みなかみ町のほうに製造上流委託をしております、年間それなりの売上げを立てて精油を作っていたんですけども、このたび東京都のご支援をいただいて、精油事業を新たに今年度中にやろうと思っております。本当に、使う木材量は微々たるものなので、それはあくまでアイキャッチといいますか、こういったものもできるんだよ、森林って可能性あるでしょうって思わせるためのフックみたいなものであって、本丸はやっぱり家を建てるなり材として丸太をしっかりと出していくというところではあると思うんですけれども、いろいろな仕掛けで都民に関心を持っていただくことというのが6次産業において大事なのではないかなと思っております。

あとは森林サービスですね。やっぱり空間を活用したいというニーズは非常に高いと思っておりますので、企業研修の場だったり、キャンプ利用とか、そういったところを弊社では今注力してやっております。

【鈴木委員】 精油って、あそこのファクトリーで売っているやつですか。

【飯塚オブザーバー】 ファクトリーさんでもやっているんですけども、また別で。

【座長】 森林サービス、サービス産業というお話が出たんですが、一方で家を建てたい方が相談に行くのは工務店、不動産屋さんなんですけれども、ところがその工務店と製材所さんがつながっていない。工務店で切れちゃっているわけですね。工務店に対するアクションをいろいろ指定する必要があるかなと思って、東京都さんのほうでもいろいろ、東京都の木材で家を建てるのであればという、そういう助成制度はあると思うんですが、家を建てる人はほとんど知らないと思うんですよね。業界の人は知っているけれど、肝心な家を買う人は知らないと思うんですけれども。そういったところで、家を建てる人と山をどうつなげるかというところ、サプライチェーンの話になるんですけど、この辺、庄司委員あるいは中島委員は何かございますでしょうか。

【中島委員】 僕のほうでですと、サプライチェーンの部分で、そのサプライチェーンを結ぶに関しても、どう考えても山から木が出てこないとサプライチェーンにつながらないと思うので、そうするとやっぱり道を造るというのが一番大事で、道を造らないと木が出てこないで、空中からヘリコプターで集材という作戦もあるけれども、なかなか難しいのかなと思うんですけれども、僕がやっぱり一番思っているのは、作業道を入れたのが多分2014年ぐらいですかね、10年ぐらい前に作業道を入れたんですけれども、そのときに作業道を入れるのに東京都の補助メニューのほうでの搬出間伐と作業道というメニューを使わせていただいて、それによって山から木が出せるようになったわけで、その副産物として一番大きかったなと思うのは、その道を介して人を案内することができるようになったというのがとても大きくて、その中で、うちは森林が結構てんでんばらばらで、すぐちょっと行くと人の家、ここは家、ここはまた違う人という形で、集約するにもなかなか隣の人と話合いをつけていたりとか、あとは道だけ通させてもらうとかがあって、そうするとやりづらいなと思っていたんですけど、結果、要は手入れが進んでいる山、進んでいない山、高齢木の山、全然放置の山とか、ツル絡みの山とか、いろいろ見られるようになって、去年ですか、森をご案内したときに「森のテーマパークみたいですね」な話をいただいたんですけれども、そういったふうに、森に入って、このサプライチェーンも含め、どうやって森から木が出てくるかというのを一連で体験でき、それに製材もしっかりとできるような——やっているんですけど、一日でというのはなかなか大変だなというのはあるんですけれども、やっぱりそういったのをすることによって結構、それを体験していただい

た方の意識というのはすごく変わるかなと。逆に、それが何か仕事に今ちょっとなりつつあるような形で、かえって伐採をする仕事ができなくなっているのが少しこれはまずいかなと思っているんですけども。そういうことがあったりするんで、やはりお金が回って、それで安定的に木材が供給できるような仕組みづくりというのを一緒に考える場というのをつくっていくのが一番いいのかなと思っています。

【庄司委員】 我々が多摩産材をくださいと言ってもなかなか手に入らないというのが実は現状でございまして、それはやはり量が少ない。ではそれはどこへ行っちゃうのって聞くと、やはり地元の方々で使っていらっしゃるほうが多いのかなと思ったんですよ。

【中島委員】 いや、それは多分ないです。僕の場合、絶対供給量が確実に少ないと思うんですけど、年間に多分出せても300立方とかそれぐらいがいいところで、最近200行か行かないかぐらいしか全然出せていないんですけども、地元で使うというよりは、ほとんどは市場に出ているんですね。でも、市場では当然良いものから悪いものがあるので、当然良い木ってそんなにたくさんあるわけでもなくて、今やっているのというのはどちらかというと整備が行き届いていない山の木を伐って、たまに良いのを出してという形なので、森には良い木が残っている状態を消費者に見せて、こんなに良い木があるよというところで木を選んでもらって高価に売りたいなという思惑があるので、それがいつできるかは分からないけど、今はそういった段階なので、良い木がたくさんはちょっと出せていないかもしれないですね。

【庄司委員】 かえって木の付加価値を上げるためにはその戦略のほうが正しいと思います。

【座長】 森林整備して、いわゆるC材・D材は燃料に利用して、そうすることによって林層改善して良い木を育ててということで、今おっしゃられたように供給量が足りないのではないかと。だけど、今の流通だと市場へ持っていくというプロダクトアウトなんだけれども、一方でこういうのをつくってほしい、それに山が応えるというマーケットインにどう持っていくかというところで、冒頭の絵を見ますと、資源は育っているんだけどもまだまだサプライチェーンがよくできていない。それに対してDXで情報を整備していくということもあるのかなと思って、まだまだ伸び代はあるし、道を入れれば材は出てくるということですね。幸い資源はあるので、これをどういうふうに利用していくか、あるいは都民の方あるいはほかの県の方に使ってもらおうかというのは、まだまだいろいろ作戦があるんだろうなとは思いますが、それを一つ一つ潰していけば、だんだん道が広がってい

くのかなと思いますね。幸い、蛇口をひねれば飲める水が出てくるという、その水はどこから来るかというところから考える必要もあると思うし、水源もポコポコ湧いているところは杯1個が浮かぶぐらいだけでも下流へ行けば大河になるということで、非常に山と私たちの生活がつながっているのかなと思います。

時間があと3～4分しかないんですけど、何かあればお願いします。

【安藤プレゼンター】 安藤です。すみません。先ほど、多摩産材を使っていくという話があったかと思うんですけども、今林野庁がここ数年行っている木材利用促進協定で、東京都と協定を結んでいる先というのが幾つもあるんですが、実際やはり多摩産材はなかなか手に入らないという中で、協定を結ばれた先のコメントというか、今の状況をヒアリングしてみるというか、集めてみるというのは重要なのかなというふうに思いました。やっぱり製材がどんどん減っている中で、より集めにくくなっているのではないかなと。そういう協定をどんどん増やしていくと売り先も出てくるとは思うんですけども、そこが供給に伴わない状況なのかどうかというのがまだ見えていないのかなというふうに私は感じております。

【座長】 どうもありがとうございます。供給として、先ほどタワーヤードがありましたけれども、東京都で1台ということですけども、やはり伐採量から必要な機械装備、それから必要な林道網ということで、設計をしていけば出てくるんだろうなと思います。そういうロードマップをつくっていくことも大事なかなと思います。

今日は、木材の利用から森林整備、それから働く人の人材育成とか、労働環境の改善とか、それから教育とか、都市部とのつながりをどうするかというようなことですけども、もう一回整理してみて、優先順位をつけながら作戦を練っていけばいいのかなと思います。

申し訳ないんですけど、お時間が来てしまったのでここで打ち切ることにして、また第二部でもしお時間が余ればお話をいただければなと思います。

それでは、本日もご提案いただいた内容を事務局において整理していただいて、今後の施策に生かしていただければと思うということで、ぜひ伏してよろしくお願いいたしますので、お願いいたします。

それでは、事務局にマイクをお返しいたします。

【榎園部長】 酒井座長、承知いたしました。また、委員の皆様、議論に参加していただいた皆様、誠にありがとうございました。

次回、10月に開催予定の第2回懇談会では、本日いただきましたご意見、ご提案を踏ま

え検討を進めまして、都としての今後の林業振興の方向性の案を作成、ご説明できればと考えてございます。

それでは、東京の林業振興に向けた専門懇談会第1回、第一部を閉会いたします。

安藤様のご講演をいただく第二部は、11時30分から開催いたします。皆様には11時20分までにご着席のほどお願いいたします。

それでは、しばらく休憩とさせていただきます。ありがとうございました。

《 第二部 》

【榎園部長】 ただいまから、東京の林業振興に向けた専門懇談会第1回第二部を開催いたします。

それでは初めに、小池知事からご挨拶を申し上げます。

【小池知事】 皆様、おはようございます。もう本当に、どこまで暑くなるのかという、連日猛暑が続いております。そんな中、本日、東京の林業振興に向けた専門懇談会の委員のご就任をいただいております、そして本日ご参加いただきましたことに心から感謝申し上げます。ありがとうございます。

今日は、プレゼンターにお迎えしているのが農林中金総合研究所主任研究員でいらっしゃいます安藤範親様でいらっしゃいます。「社会情勢を踏まえたこれからの森林・林業、木材産業」をテーマにいたしましてご講演を賜ることになっております。どうぞよろしくお願いいたします。

それから、ミズとうきょう林業に就任されておられます東京チェーンソーズの飯塚潤子様、ご参加いただいております。飯塚様には、林業の活性化と将来の担い手の確保を図る若手のリーダーとして活動をお願いしているところでございます。今日もありがとうございます。

さて、先日来、山形や秋田が大変な洪水に見舞われているところでございます。心からお見舞い申し上げたいと思います。気象の専門家ではありませんけれども、奥羽山脈があって、そして庄内平野があって、米どころでいう中で、奥羽山脈の森林なども水力が落ちているのではないかなと素人目にも感じるんですね。そして、あと庄内地域の河川の問題。一言で言うと治水治山、いかにして治水をし、そして山を守っていくのか。その最たる例が残念ながらあの地域、特にこのところひどい線状降水帯に見舞われているというこ

とかと思います。

それだけに、森林は命を守ることと、そして同時に木材の供給源であると。そのためにも、水源の涵養、そして二酸化炭素の吸収を通じての環境負荷を減らすなど、豊かな都民生活を支える上での本当に大きな役割を果たしていると改めて思うところでございます。よって、健全な森づくりを進めていきたい、そして林業を振興していきたい、これはもう社会の土台でございます、今申し上げました治山治水の実現ということに不可欠でございます。

人工林の多くは伐り時で使い時を迎えているという、これも何年も申し上げて、早く行わなければいけないと思いますが、国内外の木材需要も高まっているということから、ぜひこのタイミングを逸することなく進めていきたい。また、将来の担い手の確保ということも重大な課題でございます。どうやって育成をしていくのか。そしてまた、昨今はロボットといいたいでしょうか、ITの技術やドローンを使って境界線などの判断など、そしてCO₂の排出がどれくらい進むのかを計算するドローンとか、本当にいろいろな新しい機具も出ているところでございまして、様々な課題を、この解決策を見出し、そしてそれを実践もしていくということを進めていきたいと考えております。

そして、東京の林業の可能性を一層引き出していく。そのために皆様方にはお集まりをいただき、そして様々な角度からのご意見を頂戴したいと思っておりますので、本日はどうぞよろしくお願い申し上げます。

今後ともどうぞお世話になります。ありがとうございます。

【榎園部長】 ありがとうございます。

続きまして、出席者の紹介をさせていただきます。

本日は5名の委員全員にご出席をいただきありがとうございます。委員名簿に沿ってお名前を読み上げてご紹介をさせていただきます。

酒井秀夫委員でございます。

庄司良雄委員でございます。

鈴木敦子委員でございます。

徳永友花委員でございます。

中島大輔委員でございます。

続きまして、本日オブザーバーとして参加いただいております、ミズとうきょう林業に就任されている株式会社東京チェンソーズ、飯塚様でございます。

また、プレゼンターとしてご発表をいただきます、株式会社農林中金総合研究所主任研究員、安藤範親様でございます。

それでは、早速ですが、安藤様より「社会情勢を踏まえたこれからの森林・林業、木材産業」についてプレゼンテーションを頂戴したいと思います。安藤様、演台にお進みください。

【安藤プレゼンター】 今ご紹介いただきました農林中金総合研究所の安藤と申します。本日は、「社会情勢を踏まえたこれからの森林・林業、木材産業」と題してご講演させていただきます。

まず、私からお伝えしたいことは今日は2点ございます。1つ目、「スマート林業世界一を目指して」というところと、「木製窓の普及促進で東京の林業活性化」、こちらの2点、東京でぜひ進めていきたいと私が心から持っている施策の2つになっております——を今日はお話しさせていただければと思います。

まず、1つ目の「スマート林業世界一を目指して」。まず、日本の森林の現況を振り返りますけれども、国土面積の66%が森林を占めておりまして、そのうち人工林の樹種別面積が出ていますが、左下の図のところ、天然林等が6割、人工林が4割を占めております。実は、日本は天然林の割合が高くて、欧州はこれが逆でして、4割が天然林、6割が人工林ですので、非常に多様性豊かな森林構成を保っていると言えます。ただ、人工林の林齢別面積、こちらは右下の図になりますけれども、非常に高齢化が進んでいるというところで、こちらを改善していく必要があるという状況にあるかと思います。

続けて、「東京都の森林・林業の立ち位置」ということで、こちら、まず都道府県別森林面積を小さい順に見ましても、大阪府、東京都、香川県、神奈川県、沖縄県、佐賀県という順でございまして、東京都というのは全国の各都道府県と比べましても森林の面積の中では小さいほうに当たると。素材生産量も、面積が小さいと素材生産量もやはり低くなってしまいがち。そういう状況の中で、ではどういう施策を進めていく必要があるかということを考えていく必要があるかと思います。

林野庁としましては、こちら5ページ目、「森林・林業基本計画の基本的な方針」ということで全国の方針を示しているわけですが、その一つが森林資源の適正な管理・利用、「新しい林業」に向けた取組の展開、3つ目が木材産業の国際＋地場競争力の強化、4つ目が都市等における「第2の森林」づくり、5つ目が新たな山村価値の創造ということで、いずれも大切な施策になってきますけれども、これからの東京の森林・林業を考え

ていく中では、私はこちらの2つ目、「新しい林業」に向けた取組の展開に注目したいと思います。

6つ目です。こちら、林野庁も「新しい林業（スマート林業）」の取組を推進しております。現在の林業は収入経費を引き算しますと赤字の状態でありますが、このスマート林業によって黒字化を目指していく。低コスト化、軽労化、効率化というところで、収支のプラスを可能とする林業を目指しているというのが今の姿かと思います。

7ページ目になります。では、実際、スマート林業は推進はされているものの、どれだけ活用されているのか。そういったところについて、今年の2月に当社にて森林組合アンケートを、全国607組合ある中の100組合ほどに聞いて、96組合から結果として出ております。その状況を伺いますと、スマート林業の導入状況について森林組合に伺いますと、上のほう、資源の情報管理ですとか、森林資源の情報を取得するために、GNSSですとか航空レーザ計測、また空中写真等というものが活用されているというのが実態かと思いますが、そういった森林の現況を把握するのに非常に有効利用されている状況ではございますが、一方で、需給調整システム、配送管理システム、トレーサビリティシステムなどを利用する組合は乏しいという状況でございました。やはり丸太の集材、集荷などの流通段階において情報通信技術の活用が進んでいない現状が明らかになりました。

一方、欧米ではスマート林業が進展しております。日本よりも普及、活用されているのが実態でございます。これからやはり日本として目指す姿は、こういった欧米のようにスマート林業をサプライチェーン全体で活用していくというのが目指すべき姿の一つではあるのかなというふうに思っております。やはり木材生産のデータを一元管理していくことで、より効率的な木材のサプライチェーンマネジメントが実現可能です。いつ、どこで、どのような木材の需要があるのか、それを効率的に把握していくということが非常に重要になっております。それによって丸太の付加価値が向上していくというのが今の欧米の姿かと思います。

さらに、これまでサプライチェーンをつなげるためのデジタル化というのは欧米でも進められてきましたけれども、最近では、ただそのサプライチェーンをデジタルでつなぐだけでなく、丸太の付加価値、山の付加価値、森林の付加価値というものを高めていくために、生物多様性ですとかCO₂吸収機能といったものをサプライチェーンの中でも見える化していくという取組が進んできております。森林管理の持続可能性を評価するために、ただ木材の量を測るだけでなく、森林の生物多様性をモニタリングし、そこに付加価値を

つけるという取組が進み始めております。実際にスペインのカタルーニャ州では炭素以外にも水源涵養や生物多様性、火災などを評価する気候クレジット制度というものも昨年末から始まっているところでございます。

日本のスマート林業は、林野庁の事業のほか、民間でも実施されてきております。しかしながら、各地の取組にとどまっている状況でございまして、それぞれの取組の全国への広がりというのが乏しい状況にあります。なかなか海外ほど開発・普及が進んでいないのかなというところが実感しているところです。日本は、そうはいってもITエンジニア数が世界4位です。中でも、東京にIT企業が集積しております。そのような東京だからこそ、私はスマート林業で世界一を目指すことができるのではないのかなというふうに思っております。私は、東京のスマート林業を、東京がその世界一を目指していくことで日本全国への波及効果を持つのではないのかなというふうに思っております。ぜひ目指していくことが可能な領域ではないのかなというふうに私は信じております。

続けて、2つ目でございます。「木製窓の普及促進で東京の林業を活性化」というところでございます。

今、住宅は高性能化しております。建物も断熱性能が求められる時代になっております。東京都では屋根に太陽パネルを設置するという方針が進められておりますけれども、もちろん創エネも必要ですけれども、省エネも非常に建物は大事になっております。

その中で、日本の「窓」にはどうしても課題がこれまでありました。アルミで造られていたために断熱性能が非常に低かったというのが問題としてありました。ただ、一方で、欧米の木造住宅のサッシは木製でできています。サッシを木に替えるだけで、非常に断熱性能が高まる。

右側のポインター、「知っていますか？ 日本は「窓」後進国です。」というふうに図の上のところにタイトルを書いておりますけれども、こちらは日本で木製窓を造っている会社のホームページから引っ張ってきたものですが、非常に日本の窓の性能が低いということをお伝えされていると。やはり日本の窓もこれから木を使って性能を高めていく必要性があるというふうに思います。

そんな中、環境省も断熱性能が高い窓に補助金を出しております。ただ、実際にまだ補助金申請は2割。そもそも木製窓のサッシも非常に少ない、樹脂製サッシが非常に高いという状況でございますので、なかなか申請も進んでいない。

そんな中、今年から大手のアルミサッシ会社が木製窓に参入するという話がありました。

これから木製サッシが増えてくると思いますが、これまで世田谷区基盤の工務店は日本最大級の木製窓専門工場を青森県に造って普及促進に励んできた実績もございます。やはり東京都にはそういった木製窓を普及していく基盤があると私は思っております。

その木製窓の材料は何で造られているかというと、スギ材で造られております。その青森県の工場では、青森県産材、岩手県産材に加えて、福島ですとか茨城、栃木にまたがる八溝山系のスギを中心に使用しております。しかも最上級のA材を使用するため、木製窓市場が広がることは価値の高いA材の消費拡大につながります。東京唯一の原木市場である多摩木材センターも、スギA材を中心に原木が取り扱われていることかと思っております。木製窓に多摩産材の使用を促すことができれば、原木市場が活性化し、森林整備が促進されると思います。都庁内でも住宅関連部署との連携が必要になりますが、木製窓への支援で東京の林業活性化の可能性があるのではないのかなというふうに私は思っております。

私からの報告は以上になります。ありがとうございました。

【榎園部長】 安藤様、ありがとうございました。お席にお戻りください。どうぞ。ありがとうございました。

ただいまのご発表に関して、ご質問などはございませんでしょうか。

【小池知事】 ありがとうございます。

一言で言えば、どうやって木材の需要を増やしていくかという知恵と、そのサポート、また制度なのだろうというふうに思います。

私、全国知事会で、この木材の活用を消費者である東京からもっと進めましょうと全国の知事に呼びかけました。いつも東京は独りぼっちで寂しい思いをしている全国知事会でございますが、これにはみんなどっと賛同してくれまして、そして、それだけに今日の木材でサッシをという話については、具体的にどうすれば、どういう形で進められるのか、また関心を持って考えていきたいと思っています。

当時、私は、最初に全国知事会でもっと連携してやっていきたいと思います——ずっとやっているんですけれども、この木材をどうやって、林業をどうやって活性化させていくのかということを、長年というか、まさに国として取り組んでいるわけですが、でも伐り時が来て、かつウッドショックが来て、今やらんといつやるんだという思いもあったわけですが、その際、私は、ブロック塀の代わりに木塀にすることはどうか。ブロック塀は地震のときに倒れて人が圧死をしたりするわけで、全体で木塀にすると非常に需要は増えるという考えに基づくものなんですけれども、それと同じように、この木製の窓

を活用するという事は非常に面白い、また興味深いご提案でございました。様々、断熱性を上げるという意味で、窓についての、ですから開口部が大きいということで窓の対策は重要ということまで認識はいたしておりますけれども、それがどのような形でできるのか、今日のご提案も受けながら皆様方のご意見も頂戴したいと思っております。ありがとうございます。

【榎園部長】 ほかにございますでしょうか。よろしいですか。

《 閉 会 》

【榎園部長】 それでは、皆様におかれましては長時間にわたり大変お疲れさまでございました。

これをもちまして、東京の林業振興に向けた専門懇談会第1回を閉会いたします。ありがとうございました。

【小池知事】 今日はありがとうございました。

—了—